



Volunteer network

主任神父様・信徒会長様・教区ボランティア・ネットワークの皆様

大震災後8ヶ月がたちました 新潟・震災ボランティア会議の活動記録

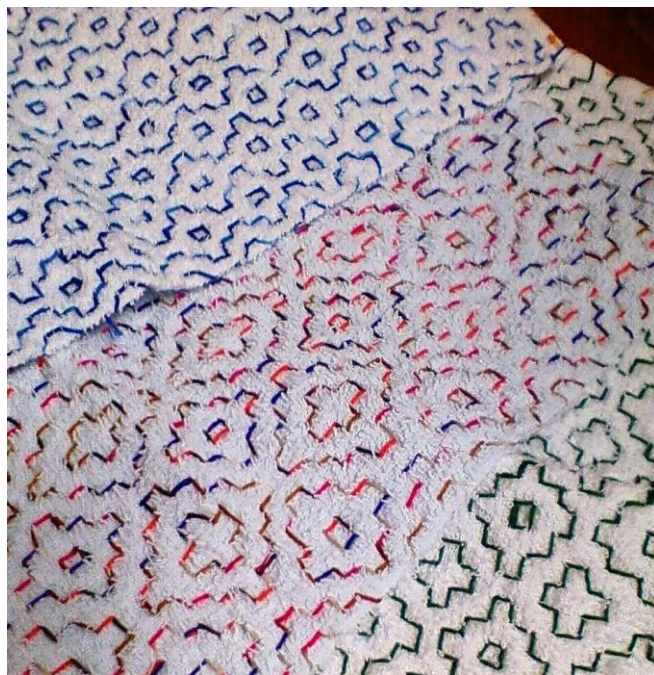
3.11後の様々なボランティアの中から、新潟市内の有志グループ「新潟・震災ボランティア会議」をご紹介します。冬將軍を吹き飛ばすような、熱意あふれるメンバーが持ち味を活かし活動しています。

3・11の大震災の報道は世界中に恐怖と同情をまきちらしました。数百年に一度の大地震・本邦史上最大の津波・連続する原子力発電所の水素爆発の3連発の災害の影響は強大で、今なおがれき処理ですら終了できず、原発の炉心の停止は終わることもなく、最低今後数年はその対策に追われることは確かなようです。

震災後8カ月の今、私たちの活動を振り返り、今後の方向を考えるのも有用と思われます。

さて、私たち新潟教区では、同じ3月に新潟地区大会を開催しましたが、カリタスによる募金活動（これは今までにないほどの募金額となりました）が主体でした。その後、被災地の隣の新潟教区としても何かしなくてはならないのではないかという声が信徒の間にあがり、花園教会のマリオさん、教会のキケさん、寺尾教会の福島の3人が「震災孤児や震災遺児への援助」の可能性をめぐって、菊地司教様に面談しました。信徒によるボランティア活動の許可を得て、すぐにボランティア活動をしたいと言う方々が新潟教会に集まり第一回の会議を4月9日（土）に持ちました。

さて第一回に集まったメンバーは花園・鳥屋野・新潟・寺尾の4教会の有志でしたが、まずすぐ出来ることと、中・長期的に取り組む課題を分けて、夫々に担当を決めて、活動に取り組むことを決めることからスタート致しました。比較的高齢者が多いために現地ボランティアではなくて、新潟にいて被災地のためにできる活動を主体にしようというのがこ



故涌井由美子さんのアイデア。刺し子の雑巾

の会の大前提となりました。短期的な課題として、その後亡くなった新潟教会の涌井さんの提案で手作り雑巾・布巾の制作を新潟地区の教会へ協力を依頼し、7月までに数百枚に及ぶ雑巾・布巾が手に入りました。手作り品の支援は、教区ボランティア・ネットワークとの連携で教区全体に広がり、雑巾、布巾に加えて、手提げ袋など、教区をあげての支援へと発展しました。これらは、Sr 佐久間の現地情報をもとに、後を継いだ野村さんを中心に福島県の小名浜教会に計5回送ることになりました。

（裏面に続く）

新潟教区ボランティア・ネットワーク 教区本部 大瀧 浩一 窓口 佐久間香子

（ボランティア・ネットワーク登録数 96人 + 13グループ）

後で聞いた話では、この雑巾は被災者宅へ声かけ運動の際に大変有用であったそうで、手作りそのものが大変好評であったそうです。

その他に仙台教区への物資支援や風評被害の野菜販売なども企画されましたが、これはボランティア会議では小規模実施に終わりましたが、物資に関しては、教区全体から支援が集まり感謝されたそうです。風評被害の野菜販売は、新潟教区のように食料自給率が高い地域では、一考を要することを実感しました。

さらに、チャリティ・コンサートの企画がマリオさん、橘さん、渡辺さんの3人を中心に立てられ、新潟清心学園のご協力を得て、7月末に、コンサートと劇(幸福の王子)の上演が行われ、各教会の大きな支援もあって大成功に終わりました。これは、一次避難所の突然の閉鎖とぶつかったために、新潟に避難された方々が参加しにくかったという事態を招きましたが、教会外の方々の参加もあり、熱演と相まって、好評ではありました。

コンサート会場受付に二種類の募金箱を置き、一つはカリタスジャパンへ、もう一つは、「風評被害の野菜を購入し、野菜不足の被災地へ送る」ためとしたところ、多くの方の共感を呼び、福島県二本松の野菜を、宮城県塩釜教会へ送ることができました。同時に二つの被災地の支援が可能となりました。

さらに被災後半年を祈念しての追悼式典(9月1日)を教区とプロテスタント教会が連動して行い



いわき教会での話し合い

ましたが、これは会としても協力体制をとりました。心にしみる良い式典となったことを喜びました。

一カ月に一回の定期的に会合を持ちながら、長期的対策としての震災孤児たちへの教育支援問題を兒玉さん(新潟)が担当で被災地やサポートセンターなどの情報を調査しておりましたが、なかなかゴーサインを出すまでには行かないまま、時が経ちました。

さて、被災6ヶ月すぎますと、さいたまサポートセンターも被災地への物資支援はやめることになりました。さあ、新潟にいて更に被災者のためになる活動とは何でしょうか? 会の今後をめぐる色々議論しましたが、この際、現地の状況を実際に見て、現地で支援に働く方々と話し合うことに致しました。10月21日、22日に、さいたまサポートセンターの方々が集まる日に合わせて、いわき教会へ参りました。体調を崩された町田師が行かれなくなりましたが、会の顧問の江部師と信徒5人で、高速道路をいわきへ。いわき教会には、市内の3教会(いわき、小名浜、湯本)の信徒7人と主任司祭と氏家師の9人、それにさいたまからのボランティアの方々数名が既に待っておられ、10時から12時まで夫々の報告とこれからの問題を話し合いました。いわきでも、支援活動の転換期に来ており、これからの事を考える丁度良い時期であったとのことで、和やかなそして率直な話し合いとなりました。

(次頁に続く)



一千戸以上の仮設住宅群。地元の木材を使用

12時から、用意されていた昼食をとり、午後からはいわき市内の仮設住宅群での声かけ運動(さいたま+いわき教会)へ随伴し、学校からの集団下校してくる子供たちを見ながら、運動の困難さと問題点の多さを痛感したのです。

話し合いの内容については、こちらから、① 今までの物資支援とコンサートなどの活動報告、② 現在新潟市に住んでおられる1900人を超える避難者の横の連携について、③ 震災孤児の状況の質問など、いわきサイドからは、① 物資支援の集配のその後について、② 震災の実情、③ 今の仮設住宅のボランティア活動の問題点が話し合われました。

それぞれ有益な結果を持ち帰りましたが、印象的なことは、佐藤信徒会長の、「ボランティア活動と言うのは、ニーズをきちんと把握してから運動するものと思っていたが、実際は、ニーズが段階的に変化してゆき、ニーズを待って行うと言うよりは、こちらから、ニーズを求めてゆくものであることが分かった」という話でした。いわきの問題は岩手や宮城の問題と異なり、放射能汚染に対応する問題が中

心に故郷にいつ帰れるのかが課題となっており、その解決の遠さを肌で感じることになりました。

その後、NPO シャプラニールの「大掃除でできる被災地支援キャンペーン」の話が Sr 佐久間からもたらされ、必ずしも自分たちだけの運動にこだわらず、他の有益な活動への参加も良いのではないかと、いう反省も上がっております。

更に、新潟でなければできない活動として、新潟市に今なお住む福島からの避難者の連携を支援する活動を、実際の避難者(後藤さん)と市議員(青木さん)を迎えて話し合っているところです。また、教育支援の困難さは、既に教育里親制度を実施しているく桜の聖母学院のともしび運動>で、該当者がいないという現実からも分かりますが、すぐにあきらめず、時を待ちたいと思っています。

私たちのささやかな活動をまとめましたが、これからもご支援のほどお願い申し上げます。

福島祥紘(寺尾教会)

ボラ・ネットでは、より早く、より大きく、よりも、小さな声を聞きもらさない「隙間を埋める」活動を進めてきました。被災者一人ひとりの心に寄り添い続けるために、待降節が、みことばを読み込み、支援活動の基礎を固めなおし、方向を再確認する時となりますように。

被災地支援ボランティアより、お知らせ・・・

クリスマス・チャリティイベント・・・歌、バンド演奏、フラダンスなど盛り盛りたくさん!

日時：12/3(土) 18:00 開場/18:30 開演

会場：桐子モダンギャラリー(加茂市加茂新田 10007-3 ☎0256-53-4111)

入場料：大人¥1,000 子ども¥500

お問い合わせ：WFN (World Friendship Network)

090-1114-0040 / 0256-57-1555

<http://www.ishimoku.co.jp/>



※チケットの売上金は日本赤十字社の「東日本大震災義援金窓口」に寄付いたします。